別紙

4

報告番号	※　　第

主　論　文　の　要　旨

論文題目	乳幼児の母親が行うミラーリングの研究 ―ミラーリングが母子の社会的交流と言語発達に及ぼす効果について―
氏　名	井　手　　裕　子

論　文　内　容　の　要　旨

母親のミラーリングは，乳児が関係性を発達させるための重要な養育行動のひとつである。ミラーリングは，母親が子どもの感情状態を鏡のように映し出す行為として Winnicott（1971　橋本訳 1979）が提唱し，Trevarthen（1979 鯨岡他訳 1989）の自然観察によって，母親が自分の乳児を模倣して交流する自然の行動として認められたものである。母親のミラーリングは，乳児とのコミュニケーションを維持（Trevarthen, 1979）し，乳児の情動を焦点づける等の機能をもつと言われており，このような知見をふまえ，発達臨床の現場においてミラーリングが自閉症児の注目を引き付け，社会性や言語の発達を促進するという研究も行われている（Nadel, Croue, Mattinger, Canet, Hundelot, Lecuyer, & Martini, 2000，Sanefuji, Ohgami, 2011,他）。しかし，このような介入の前提となるミラーリングの特徴や実際に母親がどのように行っているのかという実態を検討する研究や，子どもの言語発達を含む社会性の発達との関連に関する実証研究は希少である。ミラーリングを臨床的な介入に導入するためには，詳細な実態が解明されることが求められるが，現状は不十分である。そこで本研究では，ミラーリングの実態に即した介入方法の手立てを考えるために，以下の 2 つの目的を設定した。第 1 の目的は，乳幼児の母親が行うミラーリングの横断的な実証的検討による実態の解明である。第 2 の目的は，ミラーリングの効果検証である。第 1 の目的では，特に母親のミラーリング頻度と乳幼児の月齢との関連，共同注意を含む言語発達との関連に焦点をあて，第 2 の目的では，実際の勧奨プログラムによるミラーリングの増加と，母親と乳児の社会的交流，言語発達との関連を検討した。本論文を通して，母親の行うミラーリングの機能，効果の様相を明らかにした。本研究は，以下の 5 章から構成される。

第 1 章では，ミラーリングの定義の再確認を行い，本研究における定義を「模倣」「注意」「実況」「代弁」とし，その上で，ミラーリングの 4 つの行動についての機能を，母子交流と言語発達の観点から概観した。第 2 章では，ミラーリングの実態を探るため，母親のミラーリング

頻度と子どもの発達，ミラーリングを行う場面との関連を検討した。また，ミラーリングの効果として言語発達との関連を検討した。第 3 章では，ミラーリングを母子支援の方法として使った試みから，言語発達が促進された 2 事例をとりあげ，ミラーリングの有用性を検討した。第 4 章では，ミラーリング勧奨のためのプログラムを作成し，効果を検証した。第 5 章では，第 1 章から第 4 章までの知見を総合的に考察した。

第 1 章　研究の現状と本論文の目的

第 1 章では，定義の再確認と，ミラーリングの再定義を行った上で，これまでの研究を概観し，問題の所在と本研究の目的を明示した。先行知見によれば，母親のミラーリングは交流に影響を及ぼすと考えられるが，ミラーリングの定義や機能についての記述に統一見解が様々であるため，まずは，先行知見の概観を行い，定義の整理を行った。そのうえで，この研究におけるミラーリングの定義を，「模倣」，「注意」，「代弁」，「模倣」とした。次に，これら 4 つの行動の機能を検討するため，先行知見を概観した。その結果，母親の模倣には，フィードバックや情動の共有，情動調整，コミュニケーション維持等の機能があり，子どもの言語理解を促進し，社会性を強化する効果があるということが考えられた。母親の注意は，子どもの注意，交流の維持，共同注意促進の機能を持つことが想定された。また，実況，代弁は，子どもの行動や感情に対する方向づけという機能が中心であると考えられた。したがって，ミラーリングは，子どもの社会的交流，共同注意，言語発達等を促進させる可能性が示唆された。日本では，このような知見を受け，言語発達促進のための介入（荻原, 1995，岩田, 1996 他）が行われているものの，ミラーリングの実態が曖昧なままの事例検討であるため，実態解明，介入プログラムの効果検証を行うことを目的とした。

第 2 章　母親の行うミラーリングの実証研究

第 2 章では，ミラーリングが子どもの月齢（3，6，18，24 ヶ月齢）によって，どのような場面（起床，食事，おむつ替え，着替え，入浴，遊び）で，どのような形態（模倣，注意，実況，代弁）で行われるかという実態を探り，言語発達とどのように関係するかを横断的に検討した。

研究 1 では，母親のミラーリングの頻度と発達との関連を検討するとともに，先行知見で確認されたミラーリングの効果としての共同注意や言語発達との関連性を検討した結果，母親は，どの月齢においてもミラーリングを行うものの，具体的な行動は子どもの発達とともに変化し，子どもの行動への母親の模倣は減少する一方で, 注意を喚起するなどのミラーリングは増加するということが示唆された。また，3 ヶ月時に母親からのミラーリングの働きかけが多いほど，人に向かって声を出し始めた時期が早く，24 ヶ月時において母親が「注意」のミラーリングを行うほど，他者を気遣う発達が早いという可能性が示された。研究 2 では，母親のミラーリングの働きかけが多いのは，どの月年齢においても遊びの場面であった。特に 18 ヶ月時が他の月齢時より，働きかけが多かった。発達的な特徴として，3，6 ヶ月時には，起床場面で他の月齢時より多く働きかけが行われ，18 ヶ月時と 24 ヶ月時で，おむつ場面での働きかけが他の月齢時に比し

て少なく，母親は，子どもの発達とともに，ミラーリングを行う場面を変化させていることが示された。母親たちは，子どもの発達に即し，形態と場面における関わりを変化させていることが明らかになった。

第 3 章　発達促進的関わりとしてのミラーリングの有用性について―保健センターにおけるケース研究―

第 3 章では，言語発達に遅れを持つ子どもと母親への支援の一方法としてのミラーリングの有用性を検討した。言語発達に遅れを持つ子どもの母親にミラーリングの勧奨を行った。その結果，言語発達が促進された 2 事例について，教室での子どもの発達の変化と母子関係の変化を記述し，ミラーリングがどのように役立ったかを検討した。観察場面において，事例 1 では，固い表情だった母親が柔らかい表情となり，その後，座談会で他の母親にミラーリングの勧奨を行うまでになった。子どもの表情も明るくなり，おもちゃの取り合いもするようになった。事例 2 では，不安が強かった母親が元気になるのと同時に，子どもの興味関心が増え，母子分離できるようになった。母親の言及において，事例 1 では，勧奨した Th に，後日，代弁，実況のミラーリングを追いかけるように実行したら子どもが落ち着いてきて言葉を話すようになったこと，行動をよく見るようになったこと，そして，関わり不足を反省したことが語られた。事例 2 では，継続に関する面談内で，ミラーリング実行と言葉の増加が話された。2 事例は，ミラーリングを実行したことを自発的に言及し，変化を伝えている。観察で得られた母親の表情の変化は，母親の言及で裏付けられたと考えられる。事例 1 では，ミラーリングを行った結果，母子交流の促進，子どもの行動や感情に対する方向づけ等の効果がもたらされ，子どもの情緒が安定し，言語発達が促された可能性が考えられる。加えて，母親が子どもをよく見るようになったことで，母親が子どもの状態や変化を把握できるようになり，子どもの情緒安定だけでなく，母親の安心が得られたとも考えられ，それらの相乗効果が観察で見られた表情の変化に反映されたと推測できる。事例 2 では，ミラーリングにおけるコミュニケーション維持や促進の機能と，方向づけの機能が，子どもの言語発達を促し，それが母親の不安を和らげた結果，母子の母子分離を促した可能性が考えられる。支援成功の共通項は，ミラーリングの勧奨と母親の家での実行であることが示され，子どもの言語発達が促進されたことによる母親の心理的な危機への支援ともなり，母子支援の一方法としての効果も有する可能性が示唆された。このように，ミラーリングの効果が子どもの言語発達や，母親支援に一定の効果を持つことが示された。

第 4 章ミラーリングプログラムの試行と効果検証

第 4 章では，第 2 章での実証的な検討をふまえ，本論文の第 2 の目的であるミラーリングの効果の検証を試みた。そのために 3 つの研究を行った。研究 3 では，8 ヶ月から 3 歳の子どもを持つ 79 名の母親に，ミラーリングがどういうものかの説明を，例を挙げながら行い，いつも行っているものであることを理解してもらった。そして，「1 週間少し意識して，でも無理ない程度に行なって下さい」と教示し，1 週間試行してもらった。効果を検討するため，ミラーリ

ングの増加の有無，子どもの言葉の増加や注意の変化等を母親の報告に基づき分析した。その結果，ミラーリングが増加したと報告したのは 65 名の母親であり，14 名が増加しなかったと報告した。また，子どもの言葉が増加したと述べた母親は，46 名であり，25 名は増加しなかったと報告した。ミラーリングや言葉の増加のほかに，「子どもが喜んだので私もうれしくなって増えた」や，「私のまねを子どもがまねし，やりとり遊びとなった」という報告も見られた。このような報告は，ミラーリングが母子の相互交流を増加させる効果を持つことを示唆している。また，母親の感想の内容分析から，母親の意識化や気づきが有意に多く報告されていたことがわかった。以上から，1 週間のミラーリングの試行が子どもの言葉の増加や相互交流を増加させることがわかった。そのようなミラーリングの効果は，母親の意識化や気づきと関連している可能性が示唆された。研究 4 は，研究 3 でミラーリングが増加しなかった 14 名の母親を対象とし，ミラーリングが増えなかった要因を探るため，14 名の特徴を検討した。事前のミラーリング頻度得点をミラーリング増加群（65 名）と比較し，半構造面接で報告された子どもの変化について言及した内容，変化の数等を比較分析した。その結果，ひごろのミラーリング頻度に差はなかったが，ミラーリング増加群に比して，子どもの変化や子ども目線になるという言及が少ない上に，子ども反応言及数，子ども変化言及数も少なかった。このことから，子どもの反応や変化を言及しなかった 14 名は，それらの気づきが少なかった可能性が考えられる。また，3 歳児の母親の感想中，増加しなかった理由として，「3 歳の男児だからか，まねするな！と言われた」，「なんで同じことを言うの？と不思議がられた」という言及があったことから，ミラーリングは，言語でやりとりが可能となる 3 歳児には，適さない可能性もうかがわれた。以上から，今後ミラーリング増加を促す適切な年齢と教示を検討する必要があると考えられる。

研究 5 では，実験参加者（実験群）と質問紙のみを依頼した者（統制群）を設け，実験群には，研究 3 で行った教示をさらに例を加えて改善した説明の書面を一緒に読みながらミラーリングの説明を行い，いつも行っているものであること，代弁と実況などの区別は明確にならないこと等，母親がミラーリングを行うイメージを共有したうえで，無理なく，行いやすい時間と場面で行ってほしいことを伝え，1 週間ミラーリングを意識して行うように依頼した。そして，研究 3 で母親によって語られた子どもの変化と母親の変化の内容をもとに作成した質問紙（プログラム施行前，1 週間のミラーリングプログラム施行の直後，1 ヶ月後に記述依頼）で，母親と子どもの交流，子どもの共同注意，言語の増加等を調査した。その結果，実験群は，統制群に比して，母親のミラーリング頻度が増加し，意識化することが増え，子どもをよく見たり，母親からの関わりが増加した。子どもの変化については，指さし，会話交流，反応，嬉しそうな表情，興味関心が増加し，ミラーリングの効果が確認された。しかし，言葉の増加については，月齢の効果が高く，期待される効果は確認されなかった。

以上の研究 3，4，5 から，母親のミラーリングの増加は，母親が子どもの反応を見ることにより，子どもの反応に触発され，また行うという相互交流により生じる相乗効果が期待できることが示唆された。

第 5 章　総合考察

第 5 章では，本論文の第 2 章から第 4 章で得られた知見について，総合的に考察し，本論文の意義，本論文の限界と今後の課題について議論を行った。本論文は，ミラーリングの実態と，母親のミラーリングと子どもの社会的交流，言語発達との関連を検討した。本論文で得られた結果に基づけば，母子支援に対する意義を持つと考えられる。ミラーリングは，子どもの言語発達や社会的交流の問題を持つ母子に対する効果的な，有効な支援となり得ると考えられる。研究 1，研究 2 においては，ミラーリングの実態に関する実証的な検討の結果，母親の行うミラーリングの発達的特徴（模倣が発達によって少なくなり，注意が増加する）や，場面的な特徴（遊び場面で頻度が高い）が見出された。また，事例 1，2，研究 3 で，ミラーリングの増加によって子どもの言語発達が促進されたという母親の言及が得られたことから，ミラーリングが言語発達を促進させる可能性が示唆された。研究 5 で，母親にミラーリングを家庭で実施してもらった結果，言語発達に対するミラーリングの促進効果は認められなかった。しかし，母子の社会的交流は促進されることがわかった。母子の社会的交流の促進は，ミラーリングの重要な効果であると考えられる。母子の社会的交流を促進するというミラーリングの効果は，子どもへの関わりがうまくつかめない母親にとって，特に有効だと考えられる。ミラーリングの勧奨を契機として子どもの関わりにつながる母親の行動が増え，その結果子どもからの反応を母親が感じてさらに関わろうという母親のモチベーションにつながると考えられるからである。子どもへの関わりがうまくつかめない母親では，母子の社会的交流の少なさから子どもの言語発達に遅れが起こり得る。したがって，ミラーリングは，母子の社会的交流を促進することで，遅れがちな子どもの言語発達を促進する効果を持つと考えることもできる。

本研究で用いたデータは，横断的な手法での質問紙調査や，面接による回答が中心であった。今後は，本研究で得られた知見をさらに精緻化するため，観察をともなう縦断研究や，本研究の課題を克服するための再実験を行うことが望まれる。特に，研究 4 において，ミラーリングが増えなかった母親の存在には，プログラム事体の問題点が残されており，教示や，実験計画の見直しが不可欠となると思われる。研究 5 において，言語発達に対する実験効果が得られなかった部分については，対象年齢の選択や，教示の改善等，実験方法の再検討が課題として挙げられる。また，母子交流の促進効果が確認されたことから，母子交流に問題のある子ども，発達障害児をもつ母親と子ども等，言語発達に遅れのある子どもを持つ母親以外にも研究対象を広げ，研究手法を検討しながらミラーリングの介入に関する実践的な研究を行うことが，社会的な貢献となると考えられる。